

第34回 日釣連グレ釣りトーナメント優勝

和歌山県釣連盟 土谷賢太郎



今大会への出場は、私にとって様々な想いがありました。それは私自身が前回の優勝者であり、周りからのプレッシャー以上に、自分自身で作出したプレッシャーがあったからです。その理由は、前回の決勝で戦った田揚選手に他なりません。その気持ちを言葉で言い表すならば、マグレで勝って優勝したと自分でも、周りからもそう見えているのだと私自身が思っていたからです。もちろん、この由緒ある日釣連のチャンピオンにならせていただいたわけですから、マグレなどという言葉は使うべきではないことは重々理解しているつもりです。だから私は今大会開催まで試合を意識して自分なりにグレ釣りの練習を休まず続けてきました。田揚選手の存在があったから続けられたことです。トーナメンターとして私よりも早くから成績を積み重ねられ、今なおトップトーナメンターとして活躍されている名手だからこそ、私としても熱量を保つことができました。前置きが大変長くなりましたが、それほど想う事がたくさんあったということなのです。

試合については、初日のリーグ戦で同県の松林選手、大阪の羽瀬選手、三重の国兼選手の3名と対戦しました。初戦の松林選手は型の良いグレを釣るのが上手な方です。やりにくさを感じながらでしたが、浅いタナでアタリが出ない状況となり得意のカヤウキで運良く勝つことができました。次戦の羽瀬選手は食い渋るグレ相手にマーカーに出る僅かなアタリを掛け合わせる釣りをされ、

潮上でもグレを釣られていました。私が潮下から入ったこともあり、前半のアドバンテージでなんとか2勝となりました。初日最終の試合では国兼選手も私もあまりグレを釣ることが出来ずにいました。前半の終盤、国兼選手が大幅な仕掛け変更をされ、深いタナの良型一発狙いに切り替えられました。私とは両極端な釣りで、さすがは尾鷲をよく知られている選手だとヒヤヒヤしましたが、本当に状況が悪く小型のグレ3匹でどうにか3勝することが出来ました。心配していた小サバもおらず、雰囲気はよかったです。ヘダイやシオなどの他魚が多く悩まされた1日でした。

そしてベスト8が決まりました。やはり翌日に駒を進めた8名の中に田揚選手がいました。

翌朝、準々決勝を京都の濱田選手と対戦しました。前日よりもうねりがきつく、サラシと当て潮に苦労しましたが、得意な際釣りがハマり、駒を進めることができました。準決勝の相手は尾鷲を知り尽くした三重の重鎮、池戸選手です。安全面を考慮し、湾奥部の磯で試合しましたが、グレの雰囲気は感じられず前半は両者共に釣果なしとなりました。しかし後半、ここでも浅いタナでの際釣りがハマり、小型ながら連続ヒットで夢の決勝に進めることとなりました。





ついにたどり着いた決勝で私を待ち受けていたのは、田揚選手でした。なんとも言えない気持ちです。恐怖心とワクワクする気持ちが入り混じりますが、この試合をしたくてここまで這い上がってくることができたのです。サポートには名手池田君が付いてくれ、和歌山メンバーも応援してくれました。武者震いする気持ちを抑え、集中します。ジャンケンに勝って釣り座選択権のある私は、初めて渡礁した大石のハナレの先端寄りに釣り座を構えました。潮がサラシにぶつかり、先端寄りのハエ根付近で釣れそうだと踏んだからです。田揚選手は高い沖向きの釣り座からサラシの先端を狙っているようです。しかし、潮色の良い海とは対照的に、魚の姿は確認できずサシエも取られません。ましてや前半に組んだ仕掛けが海況にハマらず、外道らしき魚を一度かけただけで本命を拝むことはできませんでした。後半に入る前に大きな賭けに出ることにしました。浮力の強いウキを用いた、重めの仕掛けに変更したのです。その理由は、田揚選手のような上手な方が潮の中を攻めてグレが出なかったのだから、磯際やシモリ周りを直接攻めた方が可能性があると感じたからです。また、どう考えても活性が低くアタリも小さいと判断して、僅かな変化がウキに表現されるような仕掛けとしました。すると、後半はサシエが取られはじめ、シモリ際でウキが入りました。反射的に合わせると非常に手応えは軽く、20センチにも満たない尾長グレがヒットしました。しかしなんと抜きあげる瞬間に針ハズレ。これには流石に焦りを隠せませんでした。しかしその後、同じ攻め方で2匹の小型グレを釣り上げ、後半も逃げ切り体勢といったところでした。田揚選手の釣り座は左前からの風が吹きはじめ、動かない潮に対して

海況は悪化しているように見えました。自分自身もほとんどアタリを得られることなく時間が過ぎ、試合終了へのカウントが聞こえます。そして時は過ぎ、とうとうやりました。優勝です。全身フラフラで、座り込んでしまいましたがガッツポーズしたことははっきり覚えています。優勝が嬉しかったのか、田揚選手に勝てたことが嬉しかったのか、それともプレッシャーからの解放で楽になれたのか、それは自分でもわかりません。

今大会で一番気をつけたことは1つだけです。それは対戦相手が誰であるとか、知らない磯であるとか、そういった事ではなく、試合という限られた時間、場所の中で自分ができる釣りを正確にすることです。私の釣りは本当に単純で、簡素です。難しい釣りで釣りこなすのは天才です。私は負けず嫌いなただの凡人ですから、難しいことは簡単に噛み砕き、単純な釣りを心がけるようにしています。身の丈をわきまえて、自分に合ったレベルで突き詰める。父親が教えてくれたのは、釣り方でもなんでもありません。自分の頭で考えることの大切さです。これからも考え、試し、理にかなった釣りを身につけていきたいです。

最後に、コロナ禍で大変動きにくい中、万全の感染対策と選手へのご配慮をいただいた生駒会長並びに役員の皆様、そして運営をくださった京都府釣連名の皆様、決勝戦の応援やサポートをくださった同連盟の皆さんに厚く御礼申し上げますと共に、今後の日釣連の発展を願ひまして結びの言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

